
令和3年度青少年の体験活動推進企業表彰 〈審査結果〉

【表彰の概要】

文部科学省では、青少年の体験活動の推進を図ることを目的として、「青少年の体験活動推進企業表彰」を実施し、企業が社会貢献活動の一環として実施した優れた実践を広く紹介している。

【審査及び受賞企業決定の流れ】

応募いただいた52事業（大企業39件、中小企業13件）の中から、審査委員会による審査のうえ、特に優れた実践を行った企業を「優秀企業」、今後の取組に期待ができる企業を「審査委員会奨励賞」として決定した。

また、優秀企業によるプレゼンテーション・最終審査および表彰式を令和4年2月25日（金）に開催し、最優秀賞にあたる「文部科学大臣賞」、最優秀賞に準ずる「審査委員会優秀賞」を決定した。

【受賞企業】

■文部科学大臣賞（最優秀賞）（2件・50音順）

- ・ 石井造園株式会社
- ・ 株式会社ファンケル

■審査委員会優秀賞（8件・50音順）

- ・ 株式会社阿部長商店 南三陸ホテル観洋
- ・ サントリーホールディングス株式会社
- ・ 第一フロンティア生命保険株式会社
- ・ 東急株式会社/株式会社サイバーエージェント/株式会社ディー・エヌ・エー
- ・ GMOインターネット株式会社/株式会社ミクシィ
- ・ 株式会社ナビタイムジャパン
- ・ 株式会社 バリューズフュージョン
- ・ 株式会社ファーストリテイリング
- ・ 森ビル株式会社

■審査委員会奨励賞（11件・50音順）

- ・ SMBC コンシューマーファイナンス株式会社
- ・ 株式会社NTT データ
- ・ 敷島製パン株式会社
- ・ 株式会社TBS ホールディングス
- ・ 日鉄エンジニアリング株式会社
- ・ フューチャー株式会社
- ・ 株式会社マルイ
- ・ 株式会社丸協酸素商会
- ・ 株式会社リコー
- ・ 株式会社ルミエール
- ・ 株式会社ローソン

【審査委員】

- 明石 要一 氏（千葉敬愛短期大学 学長）
- 伊野 亘 氏（独立行政法人国立青少年教育振興機構 理事）
- 小原 一泰 氏（阪急阪神ホールディングス株式会社 サステナビリティ推進部 部長）
- 金田 淳 氏（公益社団法人 日本PTA全国協議会 専務理事）
- 笹谷 秀光 氏（千葉商科大学基盤教育機構 教授・CSR/SDGs コンサルタント）

「コロナ禍の中、よく頑張りました」

青少年の体験活動のミッションは、彼らが、夢と希望を持ち人生を生き抜く力を身に着ける、ことです。多くの企業がこれらのねらいをよく理解されていた、と思います。

今年エントリーされた企業の活動について、気づいたことを三つ指摘します。

一つは、コロナ禍の中厳しい条件のもと、よく活動されたことです。学校や大学では学校行事が極端に減っています。企業の方々が学校や、家庭でできない活動を多く提供されたことに敬意を表します。まさに、企業の社会貢献を果たされています。

二つ目は、最終審査に残った企業の活動の質が高まっていることです。それぞれが持ち味を發揮し、独自の活動プログラムを開発されています。ですから、審査の中では優劣をつけるのに苦労しました。

大企業部門では株式会社ファンケルが文部科学大臣賞を受賞されました。特別支援学校に向けた自立した社会人となるための「オンライン身だしなみセミナー」が審査員の目に留まりました。「誰一人も取り残さない」というミッションにこたえることが評価されたと思います。

中小企業部門では石井造園株式会社が文部科学大臣賞を受賞されました。地域の環境に貢献しようとする熱意が高く評価された、と思います。中小企業の活動の質が高まっていることが注目できます。

三つ目は、各企業がプレゼンに力を入れてはじめてことです。昨年度は書類審査の順位はプレゼンで変わることはありませんでした。今年はプレゼンで順位が入れ替わっています。発表されるプレゼンへの注目が高まっています。書類審査はどちらかといえば、活動のねらいや様子を6つの視点で丁寧に記述することが求められます。「書く力」が必要です。それに対してプレゼンは初めて聞く人の心をいかに捉えるか、が求められます。「話す力」が必要です。この二つの力は今の青少年にも求められている課題でもあります。

最後に、当日の審査の講評でも述べましたが、例えば、サントリーホールディングス株式会社が提案している「水育」と森ビル株式会社が提案している「街育」という個性的なキーワードは注目に値します。それぞれが、独自のキーワードを考えていただくと青少年の体験活動はもっと豊かなものになるでしょう。新しい問題提起を期待しています。



子供たちの体験活動は、人生の踏みきり板

2年目のコロナ禍にあっても青少年の体験活動推進企業表彰へのご応募、しっかりとした感染対策をされるとともに青少年への体験活動をご提供いただいたこと、感謝の気持ちでいっぱいです。また、最終審査でのプレゼンテーションでは、実際に企業の皆様による本物の体験活動を実体験した青少年の感動や頑張りがより鮮明に伝わってまいりました。



今年度、コロナ禍にあつて、オンラインと体験活動を上手く組み合わせている事例が多くみられました。各企業の皆様が、それぞれのプログラムでねらっていることを実現させる学習方法として、安易なオンライン化ではなく、パソコンの向こうでも直接体験ができるような工夫がなされていたり、体験活動終了後も「継続的な学び」を促すためにオンライン上にコミュニティを設定して、参加者の情報交換やスタッフからの支援によって主体的な学びに結びついた事例などがあつたりしました。これからも、コロナ時代の学びの在り方として、実体験とデジタルをどのように組み合わせて、プログラムのねらいを達成させるかご検討いただけるとありがたいです。

次代を担う青少年にとって質の高い体験活動を通して、自ら「社会を生き抜く力」を身に付けることが重要です。青少年にとって体験活動は、体育の跳び箱運動における踏みきり板のような役割を果たしていると考えます。跳び箱を人生や社会における諸課題と考えれば、多様な体験や質の高い体験をより多く経験することで踏みきり板のバネも強くなり、より高い跳び箱（人生の課題）を越えること（解決すること）ができるようになると信じています。

企業の皆様に提供していただく体験活動は、本業の強みを活かした質の高い体験活動であり、家庭や学校を飛び出し、地域の自然や文化、産業、歴史など本物を体験できる貴重な実体験の場となっています。また、次代においてSDGs（持続可能な開発目標）の達成を目指す青少年にとって、企業で培った本物の知識・技能を提供してくれる職業人との出会いは、人としての生き方や在り方を学ぶキャリア教育の絶好のチャンスでもあります。ご提供いただく質の高い体験活動や指導者は、必ずや青少年の「社会を生き抜く力」を育成すると考えます。

これからも子どもたちにとって質の高い体験活動の機会が、広がることをお願いし、子どもたちの「社会を生き抜く力」の育成とともに健全育成に力をお貸しください。

審査員として学んだこと

今般、審査員という立場で、全国の数多くの企業の熱心な取組の数々に触れることができる大変有意義な機会をいただきました。ご応募いただいた内容はいずれも素晴らしいものばかりでしたが、全般を通じ印象に残ったことについて、簡単ではございますが、以下講評としてコメントさせていただきます。



①地域との結びつきの大切さ

各企業が、事業規模の大小や事業内容にかかわらず、各々の事業で関わりを持たれている街や地域、そしてそこにお住まいの方々や活動されているの方々との関係を非常に大切にされ、丁寧にその関係性を育てておられるということを強く感じました。弊社はそのベースが鉄道事業ということもあり、それらの取り組みには大変共感を覚えるとともに、あらためてその大切さを認識させていただきました。

②徹底的な工夫

事業に参加される子供たちの姿や考え方、あるいは学校教育現場の状況等について、しっかり認識し理解されたうえで、利用する教材や運営方法について様々な工夫を凝らし、徹底的に作りこまれていることが感じられました。さらに、コロナ禍という特殊な状況下にあって当初想定どおりの運営ができない場合でも、その制約を乗り越えてさらに進化をされるなど、子どもたちの学びを止めないために全力を尽くされているご担当者の心意気と熱意に感動をいたしました。

今回は審査員として関わらせていただきましたが、私自身も、子どもたちのキラキラした表情に魅せられながら弊社のプロジェクトに関わっている一担当者でもあります。今般、多大な学びの機会を得られたこと、また自分たちにできることはまだまだ沢山あると再認識できたことにつきまして、各企業の皆さまに心から感謝申し上げます。今後も、子どもたちがいきいきと学ぶことができる社会の実現のため、皆様とともに力を尽くしてまいります。

学校、家庭、地域、そして企業との連携

子どもたちにとって、この多感な時期に様々な体験活動をする事は、将来に大きな影響を及ぼします。しかし、この新型コロナウイルス感染症により、貴重な子どもたちの体験活動は大きく制限されてしまいました。そんな中、各企業の皆様が CSR の一環として、青少年の体験活動に関する取り組みを各企業の特徴や強みを生かしながら、実行していただいていることに改めて感謝申し上げます。



応募いただいた多くの企業様の取り組みはどれも素晴らしく、特に最終プレゼンテーションを行っていただいた10社の皆様においては、内容はもちろんのこと、その熱い想いのプレゼンテーションが記憶に残っております。

今回、文部科学大臣賞を受賞された2つの企業様は、取り組み自体の内容が素晴らしいのはもちろんですが、特に社内での連携、意思疎通、また地域密着とその継続性と言うところが一つのポイントであったのかと思います。会社全体で、この取り組みを応援、または情報共有し、一つの事業として自然と成り立っているという点は特に良い点と感じました。そして、核家族化が進む現代では、家庭だけの教育、子育てはもはや不可能と言われる時代に入ってきており、学校と家庭だけでなく地域が入り、お互いが連携、協力しながら子ども達の教育環境と整えていくと言うことが必須となっておりますが、そのネットワークに改めて企業（企業も地域の一つという考えもあるが、ここは分けて考えさせていただきます。）として加わることで、子ども達にとって普段の学校生活や家庭での生活の中では難しかった、またはさせられなかった体験が実現可能となっていると思います。

今回応募された企業様以外にも、活動の大小はあるかもしれませんが、青少年に対しての体験活動を実施していただいている企業様は多くいらっしゃるかと思います。このように素晴らしい取り組みに対し、表彰を行い、感謝と評価をすることは、多くの企業様にとっての励みになるものと思われます。是非社会一丸となり、子どもの健全な育成に今後ともご尽力頂ければと思っています。

本格化する SDGs 時代における青少年の体験活動への企業の貢献



今、新型コロナウイルスのパンデミックに対処した「グレート・リセット」（大変革）が求められている。この中で、企業経営は「X」の時代への対応が求められている。

CX（カスタマー・エクスペリエンス）、DX（デジタル・トランスフォーメーション）、GX（グリーン・トランスフォーメーション）、HX（ヒューマン・トランスフォーメーション）、D&I X（ダイバーシティ&インクルージョン・トランスフォーメーション）。そして、これら5つの「X」を総合化して変革するSX（サステナビリティ・トランスフォーメーション）が重要になっている。

なぜこのように日本でXが求められているのか。それは、残念ながら日本ではこれらに関連する変革が遅れてしまったからである。この遅れをどのようにスピード感をもって取り戻すのか、それが今問われている。

この変革のためにこそ、SDGsが役立つ。SDGsを盛り込んだ国連合意文書「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の題名にある通り「変革」に役立つからである。

変革志向・未来志向で設計されたSDGsを経営の各要素（ヒト・モノ・カネ・情報）のすべての面で活用する経営がSDGs経営である。

特にSDGs17目標の中の目標4「質の高い教育」が注目される。課題が複雑化する世界を変革するには、みんなで学ぶ必要があるからである。SDGsではSociety5.0に向けた未来社会づくり、地方創生と並び「次世代育成」が最重要課題である。体験活動では、子供たちをどのように育てたいのか、どのような力をつけさせたいかを意識し、そのための教育的観点から企画と運営を行い、支援体制などを検討することが重要である。知識や手段を一方向的に伝えるのではなく、体験を通じて何をどのように学んでもらうのかを工夫することが「質の高い教育」につながる。

このような中で、本表彰制度は、企業がCSRの一環として行う青少年の体験活動に関する取組を表彰するもので、今年度で9年目となった。その審査基準に特色があり、「教育的工夫と成果」、「本業活用の工夫」、「内容・進行管理」、「情報発信の努力」、「社内理解の醸成」、「新規性・改良点」などの視点に加えSDGsの視点で審査している。

私の専門は、SDGsを経営として実践する「SDGs経営」の推進支援であるが、SDGs経営を見ていると、対外的な企業価値の向上と社員モチベーション向上の効果がある。今回の受賞事例でもその効果が上がっている。

体験活動のテーマは、「職業・仕事」「科学・技術」「自然・環境」「生活・文化」など多岐にわたっている。本表彰の事例も参考にして、ぜひ、企業はSDGs経営の一環として次世代育成に取り組み、企業の体験活動推進の輪に広がりを持たせて頂きたい。